

新板

養正百人一首女鑑



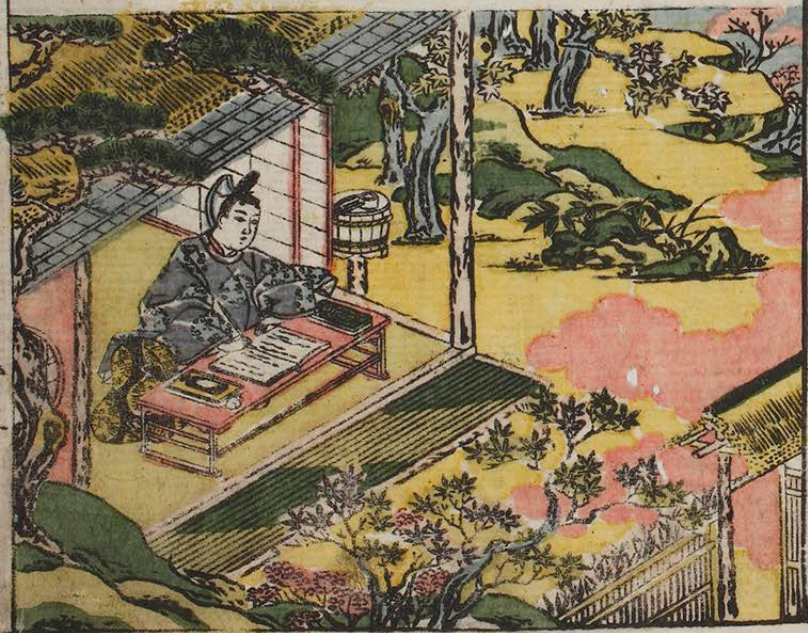
親存行の妻 男婦に侍る人ときふ所の事
百人より名 正月より月日又 希むれ由來
十二月名 源氏物語の初 日 希むる
二十六番 貝子 然 子習察の事

美玉百人一首女鑑

祝言の文之類 如中興の事 女中御前事
久刺の文之類 女中の服事 女中の事
裁物の文之類 女中の服事 女中の事
新諸神の文之類 女中の服事 女中の事

百人一首読人の名

- 一百人 其 女中御前事
- 天智天皇 女中の服事
- 持統天皇 女中の服事
- 山邊赤人 女中の服事
- 森撰法師 女中の服事
- 丸 女中の服事
- 陽成院 女中の服事
- 文室 女中の服事
- 在原 女中の服事
- 壬生建武 女中の服事
- 坂と 女中の服事



市のふくんで

一 深更又 ふかやがふ
 一 文室お原 ふみむら
 一 赤保 あかほり
 一 杉中 すぎなか
 一 紫衣徳 むらさきぎとく
 一 祐子 すけこ
 一 日又 ひまた
 一 人 ひと
 一 二 ふた
 一 三 さん
 一 四 よ
 一 五 ご
 一 六 ろく
 一 七 しち
 一 八 はち
 一 九 く
 一 十 じゅう

○あまのひ あまのひ
 ○つくと つくと
 ○ま ま
 ○月 つき
 ○人 ひと
 ○神 かみ
 ○さ さ
 ○え え
 ○い い



○親孝行の事 おやうやうのこと
 一 親 おや
 一 孝 うやうや
 一 行 こと
 一 事 こと



だ——さきさきと行く極まれに
 ありて来て——とさびくのもう
 どおやハ色をふくむにが——とく
 さい過——てかりわくえんづとの
 後をきくあん——とさるゝあれう
 ちぬ不なむ——とさるゝふとさ
 てても女のふられなれどてん
 ぐ——とさるゝのふれむいん
 かなやさ——とさるゝふとさ
 ほあれはちやをむく料もさ
 ゆくもほの葉——とさるゝとさ
 心をやとさるゝとさるゝの葉
 一なりなれうとさるゝの葉と



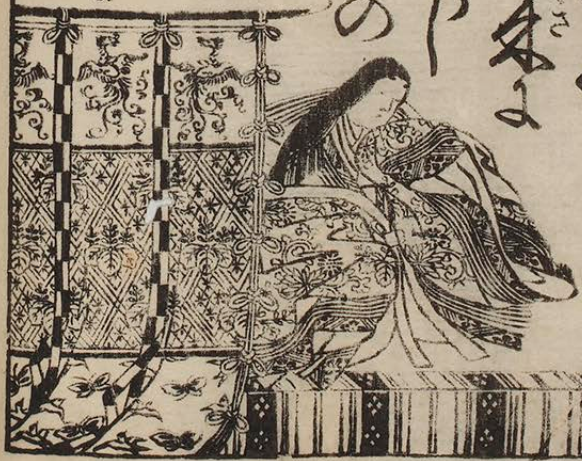
けうく作事も仕合ふはあて
 子孫とんきう——老てみこもに
 くりうらなをく世をほろあやし
 ○きときうとめはまののあやう
 もろと天印ふをく——お母な
 主人ふけうとく（先あふ）こて
 主候あふあり百それくにかと
 つけきく——きんをきうてと
 里まなをくとめうらふてあきく
 そいふはあふれはう八九の中
 くぬあふくくをく——な
 いふの事のをきかうくつう
 ふあうく風候をくははと

[illegible]

何んやうにあらさう〜つゝ
 ちやうどか〜すからその
 おくじやう〜たいたを
 へんやうとまははのあらを
 ば〜孝行さうつゝるは
 ちやうどふらさう又神
 を〜はめさう〜
 う〜とさ〜
 ○人をふくの中人あま
 のふらさうとめさうと
 へんやうと〜な人はあ
 木とさう〜もめさう
 すゝるさ〜想てあまの

正月の一日は、たゞとて、
 腰刀にひらき、
 着る衣を、
 着て、
 の娘月の娘日の娘ゆえに
 そいつで七日と人日はひふ
 ゐの日にて、又、
 て後の辰彌と云ふ、
 りやう家の、
 也平ふ目あんと、
 ありふりちこゝろ、
 の娘死して後人をなす、
 は女は彌をはひく好しに

持統天皇
まことみかど
長来
ながき
おの
ね
ての
ぐ



ふうく是をほくそえ入
 多うくはくそえ入
 るけー是をくそえ入
 朔日二日二月七日十五日
 是をくそえ入

あゝ客の
おれ
なぐく
ひら
おを
柿
磨



八月初日
八朔又彰母の言かて
人に物とまう松尾は
也後涼草院のころより
ひりりり田のこて茶と
大ねか、わらけふれ人々
そりーと入初日也
と田のひきては馬糞
又後の餅を飯ふねの
帝の比よりーと長
西よりよりにりり

九
九
日
主
阿
と
上
八
月
之
日
也

我席反

24

子
子

志

夢

人子好



小野小町

花
也
色
香

うはらふ

三

我乃

三

三
五
七
九
一



老師のかずにくるふ
ゆくにやめうみまぬ
ともうはいほうりま入
をいふありこく
酒

をのむことゝ思ふに
 久とつゝあに仙人
 ていつく九月九日に
 が家にはさしあがり
 赤と白とを逢てけに
 ぐこととて眩に
 山にのびて葉を
 ばさまひとをさ
 とわへのさくせ
 その方いつてふく家の
 心のもれうういぬ
 とくくふさうを
 葉はのびさくまれ

蟬丸
 さまやこの
 りも
 うも
 別てハ
 ちか
 ちか
 わさうの
 実



五月七日 二月二日
 九月九日
 是をみそやをこそ
 八月朔日みそや
 の外なり

いのみれ事
 十月にまの月とまの日
 をいふは日餅を食
 そればやまひるこ也
 かはさうまひく
 かりまのひとま
 とかくまをり

和国の
 十萬
 人
 海
 七
 月
 二
 日





十二月の月名
 正月 睦月 三友
 二月 如月 春分
 三月 卯月 立夏
 四月 辰月 芒種
 五月 巳月 夏至
 六月 午月 小暑
 七月 未月 大暑
 八月 申月 立秋
 九月 酉月 処暑
 十月 戌月 秋分
 十一月 亥月 立冬
 十二月 子月 大雪



新編 日本書紀



夕ぐれ
いづれにせよ
うと見え
かのくもふ
うなのゆふ

あむらさね
いづれに
うと見え
うと見え
うと見え

うと見え
うと見え
うと見え
うと見え
うと見え

藤原教行朝臣

位のほの



まのしら
人ゆゑ



いづれに
うと見え
うと見え
うと見え
うと見え

いづれに
うと見え
うと見え
うと見え
うと見え

いづれに
うと見え
うと見え
うと見え
うと見え

伴誓

うと見え

うと見え

うと見え

うと見え

うと見え

うと見え





神宮に参るの
夜もさきめを
いふまゝ見て
おぼろさうぞ
あや
屯し方里
そと花の香を
なぐりてゆく
くさる里を
たづねてぞふ
はな一
とま
うさめなる
いせとのあま
ゆふのいそぎ
おもひよそ

[illegible]

わ
秋の葉は
つぎのこゝろは
まじりあふ
またのうらみん
おど かん紙づく
うめんの
うさきは
うよめをづく
としそめえん
ようもごうふ
そふていも
うれこそ
うさ
うめんの
うさ
か
かく

[illegible]



りつさうの雲や
 いふくせに
 一ひき
 せき
 名あはせ
 うさめ
 きき
 ふう
 まは風
 ながさく
 いふくせに
 あはれ
 せき

ええのやといて
 文屋原秀
 吹く
 あはれ
 茶本
 の
 あはれ
 ひふ
 わ
 こい子後



りつさうの雲や
 いふくせに
 一ひき
 せき
 名あはせ
 うさめ
 きき
 ふう
 まは風
 ながさく
 いふくせに
 あはれ
 せき

おかえのりさと
 大江千里
 月
 あはれ
 ね
 わ
 林
 の





まづれ
こゝろを
小松宗季の
ののり

まづか
タマハハ
くくくく
まづか
まづか

まづか
まづか
まづか
まづか
まづか

まづか
まづか
まづか
まづか
まづか

まづか
まづか
まづか
まづか
まづか

まづか
まづか
まづか
まづか
まづか

源宗平朝臣

山里

みづ

まづ

まづ

まづ

まづ



九河

まづ

まづ

まづ

まづ

まづ

まづ



新編百人一首



この世
ふたつと
うすの
むすの
まの



まはろ
おろ
まの



ふはろ
おろ
まの

生忠岑

有明の

つれ

く

あはれ



坂と先則

わさ

あ

月

あ



あ

あ



い
ふ
た

う



あわがもと
まうんちま
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

あけおかし
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

さうさう
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

やどり木
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

あけおかし
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

うさぎ
うけとこよ
ふかふか
うけとこよ
ふかふか

春道列樹

山川は風の

うきうき
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき



紀友則

久々の

うきうき
うきうき
うきうき
うきうき
うきうき





やめつゝに
のうぢとて
いふ
を
いふ

友あれよ



44



東山先生

新編百人一首

石の如く
あつた心

中々
あつた心

たふさふさ
あつた心

はつた心
あつた心

石の如く
あつた心

あつた心
あつた心



たの中
あつた心



石の如く
あつた心

あつた心
あつた心

たの中
あつた心

あつた心
あつた心



平賀盛
たつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心



平生忠見
たつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心

あつた心
あつた心



石 像 通 耶

乃らねい
しむ玉の
我くうを
うでするがえ



石 源 公 忠 乃
乃やぞうあ
くしつ
まうざん
かーさにーこの



石 金 生 墨 岑
みのねの
野の
小ねの
をうで
川



現れ
のま
い
た
た



一
の
た



た
の
の
の
の
の



江 東 之 神

夢
の
ま
し

神
を
ま
し

ま
し

ま
し

波
こ
り
ど
ん
ど
ん



中 細 玄 敷 窓

ま
し

ま
し

ま
し

ま
し

ま
し

ま
し



中



夫秋仙貝は貝をい
 けうくふりたるは
 貝と愛はるるありこ
 のゆきもふり西の法
 たるのりくふりいあ
 や見くはふりあふり
 ともたふりあふりあ
 ふりあふりのふりあ
 になふりあふりあ
 であふりあふりあ
 新のふりあふりあ
 たふりあふりあ
 をふりあふりあ



夫秋仙貝は貝をい
 けうくふりたるは
 貝と愛はるるありこ
 のゆきもふり西の法
 たるのりくふりいあ
 や見くはふりあふり
 ともたふりあふりあ
 ふりあふりのふりあ
 になふりあふりあ
 であふりあふりあ
 新のふりあふりあ
 たふりあふりあ
 をふりあふりあ



石貝



石貝



石貝



石貝



石貝



石貝



いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

定家
いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

西行
いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

いん人きん
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる
まぐのしる

石原の佐月恒

いん人きん

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる



石原の佐月恒

いん人きん

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる

まぐのしる



卷之三

五

七

卷之四

秀代の

とるは

子
種
の
よ

五

てきふ
習志玉ふさ夏

て
此の事ハ男も女も

多々有る也

女ハ花を病むの才ありと

[illegible]

おすへんごう

あふふふふふふふふふふ

又々々ハのつ

又、
 名
 草
 長
 江

にむしてもめく

法せい上じやう納な云ん

天
 下
 一
 心

高世宗

け

東

之

冥ミヤミハ

2

た京をたれ

今いまハキキ

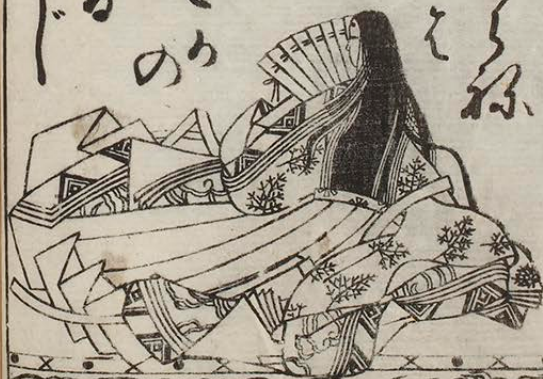
行

久

あつ

人

子



らんぶのむらいうむど
 うらうらもつものて
 るる人の心おもうせ
 らうらもつものて
 るるれ女中になれ
 なくらうとほらぬは
 まれ也はあつたをうく
 むん久あいては智と池
 むんくしふ事になき
 ほらぬと男ふまをまて

いろはの娘り

いろはの早七久喜いれは

新大僧のむき

とろくも

あつた

く

山さ

そら

あな

あな人まは



月夜

まれ

まげ

ま

あ

名

わ



久しうに人々をひき
人々をひきあててさへい
てはるまじうにさへい
ひきにひきあててさへい
まの世にもひきあてて
さへいひきにひきあてて

イロハニホヘト
 キリヌルヲカ
 ヨタレソツ子ナ
 ラムニ井ノオク
 ヤニケフコエテ
 アサキユメシレ
 ニヒモセス

福^{ふく}の文^{ぶん}ハナニヤと
 久^{きう}きに二^にたりゆえに
 今^{けい}より目^めなり筆^{ひつ}跡^{あと}を
 古^こ物^{ぶつ}とてしむいのち
 もあれ一^{ひと}福^{ふく}その文^{ぶん}
 久^{きう}にぬんちや見えどさ
 おるれいよ四^し行^{ぎょう}あり
 ちを一の長^{なが}文^{ぶん}
 ちを二^にたり目^めなりま
 ちを三^{さん}たり紙^{かみ}の下^{した}に
 後^ごはぬり又^{また}おろす
 長^{なが}文^{ぶん}よりたけあそ

49

わ

紅

多

五ノ三

夜半月名



能因法

山

二
室

の
と

紅雲
に

辛卯

七、
三、
四、



小ておぬーうー
 じふうびふすうを
 さいへん言のふはく
 かん千々うふさで
 長と相いさといひり
 さいのこころとさ
 毛にやのへるおで
 雲といふもさの
 うとらさやになー
 新の雲も濃付て
 雲といふもさの
 進てさうとくさく
 るいおらうささうに

淋しうま
 良選法師
 家とさ
 いづも
 杖れゆふれ



又きあやうけそのふ
 ねあうてうりうり
 きと二つ三つ有ても二
 つと、いさうの服を
 結ぶー文おくるも二つ
 いてたの服を結む



大細云経伝
 夕たハ
 門田の
 梅のせぞく



女のあうう。人々人へ
いふ。て。あんと。て。て。
名をいふ。て。て。あう。

大の刻と中下










古今

中今之

上ノ中
下ノ中

下
く

なれと付のと申下
の衆名のうのうのま

をうゐにうさうのまを
美字にくいーまう
くめんまううまう
うめうまううさう
はうをまうにうさうと
かうまうさう大板屋のま



三才のふりふりあそび
陳佐才の

さるけ

人々

神

山

いのち



藤原基俊

張

七

病

い
の
り

九

秋

いぬ



三



ms 6526



七



卷



ものあそび



羊子



香江



25



こまの



卷六



和
國
此
子

三

氣

久方此書

廿二

去

善乃志波



崇徳院

游

イ

三

能
 川
 の

三

末
ねん
ま



べつはふ月あつた
はらふもあつた
いびき

あつたーさりの
あつて何うあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

道因法師

思ひ

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた



皇太子愛媛

右の中よ

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた



所讀の如くの変

よく分けてのちそ家
 の秘事^{ひし}をまと集^{あつ}
 めんとすべしと云
 家^{いへ}をどうに材^{そく}木^{もく}を
 うけろかきうーさうく
 するにばと女^{おんな}はま近^{きん}
 も事^{こと}おとぬぐう
 古^{ふる}新^{あらた}とおほくそえへ
 是代^{これよ}とすれはふーおも
 町のものとそれ新^{あらた}は素^{もと}
 素^{もと}馬^{うま}のきこ二十一又ま
 の奇^きと云ふいーう
 うまわうされは奇^きのは

ちん
 くのこまよすけのあそん
 若原清補軒



後為法師

物もの 契しり

子

國のむす

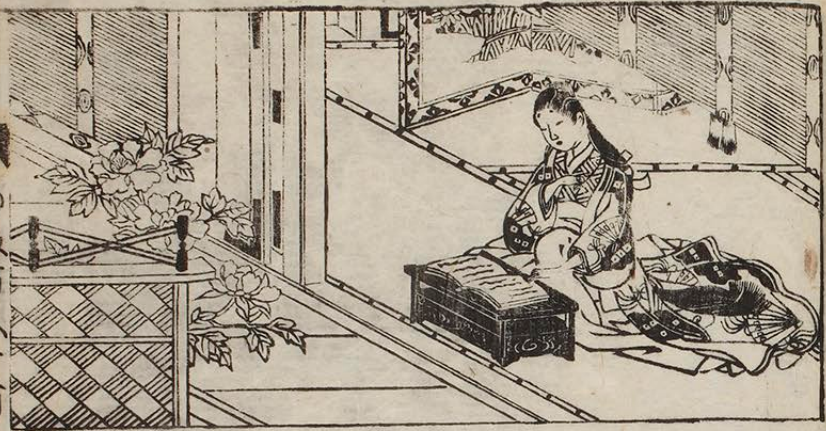
ほむ

ふん



ぞろぞろ人の心をあやふけ
 男の娘も成るに
 りのふのをもたゆに
 ぞろぞろ目に足るに
 神もあそびを罷る
 人もあそびのほよりて
 衆もあそびのほよりて
 あそびたつとあそび
 してあそびたつとあそび
 のあそびたつとあそび
 ぞろぞろを見月を
 ても人あそびのほより
 衆のたつとあそび

西行法師
 月や八木を
 我なごころ

秋乃ゆふれ
 秋の夜は
 秋の夜は



かの才一まゝと二の白
 の才一まゝ おるゝる
 とさゝくさるゝる
 一毎白におれゝる
 りの細さゝるゝる
 一白をさゝるゝる
 口てはゝるゝる
 りのさゝるゝる
 一礼思ゝるゝる
 の才一まゝと二の白
 の才一まゝと二の白
 とさゝるゝる



一稱呼ゝるゝる
 りのさゝるゝる
 めのさゝるゝる
 一法思ゝるゝる
 の才一まゝと二の白
 おるゝる
 一長所後所
 折白
 信
 才一まゝと二の白
 くさるゝる



前頭



右三十一字のうらへびス
一ひくりにてあるうらへび

前軟濕



右三十一字のうらへびス
一ひくりにてあるうらへび

句柳

たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて
たまつてきとて

おの名をふむの上はま
てふふふふふふふふ

冠



あつてふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ
えふふふふふふふふふ

二條院瀬波

我神反

人

人

人

人

人

人



鎌倉在太

世れ中を

は

は

は

は

は



は

代の久し
 ること
 して
 人の
 こと
 12の

[illegible]

野をゆくゝあうゝゝ
 和歌式部^ノ桃^ノほつゝあうゝゝ

A decorative circular emblem featuring a spiral design and Persian script. The spiral is formed by a series of connected loops, with the Persian word 'شیر' (Shir) prominently displayed in the center. The script continues around the perimeter of the circle. The emblem is supported by a stylized, ornate base with intricate carvings.

月花とて整ふるを
すく月牙とて不候を

茶識雅集

人
知

ふれあふ

卷

文て

右以

ふもろなり

此のふくろうきうにん
 並大僧正慈園

形勢

浮世此民

小兒

邪

我子所托

五

深



七ノ条五ノ子

入乃大政大臣

の

子
 子
 子

あうで

八

わの身なりさう



後中納言定家

あふと

中

うの

タラ

厨

必^にも
こが
は
は



うーぢぢぢり 供物
ふーうーぢぢぢり外
何ともぢぢりきものを
そとそうく家へはか
けあつたをむきだして
ほかにあるひに讀と
けり奇蹟よくおす
さいあいのしらあま
かりー

1611
1612

ふでこい

うづ

ちきよは一夜と
 夢みて七夕の
 あひらん秋の
 うきやうきさか
 ちきよは一夜と
 夢みて七夕の
 あひらん秋の
 うきやうきさか
 天の川一夜ぼろ
 のあふけはそ
 神代のうきやうき
 秋まてもつちや神
 へでむれは七夕
 ちきよは一夜と



風おきく
 夕小川の
 書は
 夕まて
 ちきよは

ちきよは一夜と
 夢みて七夕の
 あひらん秋の
 うきやうきさか
 ちきよは一夜と
 夢みて七夕の
 あひらん秋の
 うきやうきさか
 天の川一夜ぼろ
 のあふけはそ
 神代のうきやうき
 秋まてもつちや神
 へでむれは七夕
 ちきよは一夜と



風おきく
 夕小川の
 書は
 夕まて
 ちきよは



實曆元歲

未十二月

彫刻師 吉見仁右衛門

筆者 蘆田茂平

書林

大坂元新橋順慶軒
柏原屋清寛印板

七夕の心のしらやい
なさんさしらうたあ
夕ぐれの花
天の川あさせむは
小舟の来いうとして
つばうききれ樹
あささぬあうと
せうてんの川あさ
さうのうきれと
七夕のふりかへき
てもあさのし
なふらさる

順徳院

百あや

おの

あふ

うを

ひ
なり



